
惚れ薬&坂の家

晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

惚れ薬&坂の家

【Nコード】

N2799F

【作者名】

晶

【あらすじ】

惚れ薬惚れ薬を完成させた博士の話。馬鹿なショートショート。坂の家ホラー。源氏に滅ぼされた平家の末裔の話。学生時代の友人の田舎を訪問したとき、そこには……。

「悪いな。もう少しで着く」

ワイパーを操作しながら、平野が私に言った。

瀬戸大橋を渡って、電車で香川に到着した。琴平駅で下車してすぐ、迎えに来てくれた平野の車に乗りこんだ。それから二時間余り、山道を走り続けている。電車を下りてから、ほとんど山しか見えない。

今頃になつて、うどん店に立ち寄りなかつたことを後悔した。腹は空いてなかつたが、本場讃岐には、`うどんは別腹`という言葉があつたはずだ。

「晩飯は妹がこしらえる。たつぷり山の幸を味わえ」

「妹さんも、こんなところに、よくいられる」

「住めば都さ。お前には分かん」

「そうかもな」

大学同期だつた平野に誘われて、連休を利用してやって来た。しかし、平野ほどの男を引きつける魅力が、こんな辺境にあるのだろうか？　ゼミをトップで卒業した平野は、教授の推薦を蹴つて郷里で就職した。故郷に戻って林業に従事する　そう聞いた誰もが耳を疑つたものだ。

「あそこだ」

車が止められた場所に、幹が三つに分かれた大きな松があつた。

指差された先に、霧雨の中、四、五軒の民家が見えた。

「隠れ里だ」

シートベルトを外しながら、平野がそんなことを言った。

「かくれざと……？　何だそれ？」

聞き慣れない言葉だ。

「壇ノ浦で滅んだ平家の人間が、源氏から逃れて隠れ住んだ里だ。それで、こんな辺境にある。さ、下りてくれ」

平野に促されて車から下りた。屋敷（家と呼ぶより、その方が相応しかった）は細くくねった坂の上に建っている。

「気をつける。雨で緩んでいる」

一軒の屋敷の庭に入った。玄関の前で立ち止まる。

「ここか？」

平野はうなずいて、それから引き戸を開けた。

「お客様の、ご到着だ」

入ってすぐ、八畳ほどの広い土間になっていた。左手に真つ黒い三枚の引き戸。その一枚が開き、年配の女性が顔を覗かせた。

「母さん。大学で一緒だった池部友波。ちよつと変わった名前だけど」

私は少しむつとしながらも、

「池部です。二日ほど、ご厄介になります。これは、つまらないものですが」

大阪から持ってきた、和菓子の詰め合わせを差し出した。

「つまらないものを、オレ達に食べと？」

「これ」

と、母親が息子をたしなめた。

「すいませんねえ……。お気遣いなど、いりませんのに……」

「いえ。本当に、ありがたく思ってます」

「ま、こんな奴だ」

土間を上がると、畳敷きの部屋になっていた。その奥の仏間を抜けて、私は座敷に通された。

「すぐ、お夕飯に致しますから」

母親は、そう言って座敷から姿を消した。

「タバコ吸っていいか？」

「その灰皿を使ってくれ。ま、楽にしてろ」

座敷の広さは十畳もあった。それに床がついている。床には青磁の香炉が置かれ、平野が言った通り尋常の家ではなさそうだ。それを見越したかのか、

「築、三百年だ。その香炉は、平家の公達が使ったもので、出すとこに出せば、」

そう言っ指を一本立てた。

「百万か？」

「馬鹿を言え。一億だ。元々は清盛公の持ち物だった。文献にも、そうある」

「本当か」

「嘘を言うか。特別な日しか出せんのだぞ」

「特別な日？」

「ああ。お前が来るからな」

「まさか」

「ははは。ま、そんなこと、どうでもいいじゃないか」それから腕時計を見て、「まだ、少し早いかな」

言っがなり畳に横になった。

「おい。トイレはどこだ？」

「向こうだ」

横になったまま指差した。

奥に続く廊下があった。そこを進むと、障子の開いている部屋に突き当たった。若い娘の姿が見えた。

私に気がついた。

「トイレを探しているのですが……」

すると彼女は、

「こちらです」

トイレまで案内してくれた。

私は彼女の美しさに驚いた。抜けるように色が白く、これぞ黒髪という長い髪が腰まで届いていた。背の高さもほどよく、何よりも目が綺麗だった。

座敷に戻ると、やや本腰で眠りかけていたらしい平野が目を開けた。

「あつたか？」

「妹さんに会ったよ」

「そうか」

そう言つて、タバコに火をつけた。

「CMの製作会社だろ。アイドルに会えるか？」

「オレは経理だから関係ない」

話題を変えた。

「平野の平は、平家の平だな？」

平野は起き上がると、タバコの火を消した。

「その通り。我々の祖先は、重盛公の姫君をお守りして、この地に落ちて来た」

「しげもり？ おい。重盛と言えば、確か清盛の息子で、言うなれば平氏の直系じゃないか」

平重盛の娘 平野にもその血が入っているのではなからうか

？ 例えば江戸の諸藩では、藩主の姫君が臣下の妻として与えられるようなことが頻繁に行われていた。そして平野の妹の美しさこそが、それを証明しているように私には思えたのだ。

こんな美しい妹がいたとは……。そう言えば、平野は昔から家族の話をしたがらなかった。

「重盛か……」

「ああ。直系は跡絶えたがな」

それで清盛の香炉が、ここにあるのだ。間違いない。私の想像は、きつと当たっている。

料理が運ばれて来た。時刻は六時。テーブルの上に、山の幸が並べられた。

「さあ。どうぞ召し上がって」
母親に勧められた。

「遠慮するな。都会人には珍しいご馳走のはずだ」

平野の言う通り、こんなのを街中で食べようと思えば料亭にでも行くしかない。一度、田舎のペンションで、この手の料理を食べたことがある。それはそれで美味かったが、どこか観光ずれしっていて、

天ぷらの隣に市販のシューマイが添えてあったりで、はなはだ興を削がれたものだ。

母親は娘を残して奥に下がった。

「おい。酌をしてやれ」

平野が妹に命じた。

「いいよ」

私は断った。しかし彼女は、

「どうぞ」

と、嫌がりもせず酌をしてくれたのである。

「もう下がっていいぞ」

平野が言つと、

「はい」

と、言つて、彼女は奥に下がって行つた。

「どうだ？　今頃の娘とは違つて素直だろ」

「ああ」私は、うなずいて、「名前は？」

「敦子だ」

敦子……。そう言えば、平家の公達に敦盛というのがいた。

「ところで、親父さんは？」

話題を変えた。

「急な用事で出かけた。暫く帰らん」

「そうか。しかし、こんな辺境に女二人置いて大丈夫か？」

「何だ？　心配してくれるのか？　なに。平家の霊が守つて下さる」

「平家の霊？」思わず聞き返した。「何だそれ？」

すると平野は、

「霊とは魂のことだ。なあ。人が死ねば、その魂はどうなると思う？」

「どこにも存在しなくなるんじゃないのか？」

「そう思つか？」

「じゃあ、どうなる？」

「その前に、そもそも魂とは何か？」

それは、宇宙の対極なん

だ」

「脳が一つの小宇宙ということか？」

「そうじゃない。例えば、磁石にはSとNの二極がある。それから、電極にはプラスとマイナス。人間にも男女の違いがある。では、魂の対極は？ それは宇宙そのものではないのか？ 魂とは物質に対極するもので、つまり宇宙の始まりから存在しているんだ。それが人の姿を借りたり、或いは人間以外のものに宿ったりする。要は、我々は宇宙の対極である魂の入れ物なんだ」

「……」

少し呆れた。ちよつとばかり浮世離れしている。

「ま、いいさ。ところで料理の方はどうだ？」

「美味い。本当に今日は来てよかったよ」

「道中、文句を言った甲斐があつたか」

「まあな」

食事の後、風呂に呼ばれた。それから十一時ごろまで話をして、長旅で疲れているし、そろそろ寝ようかというときになって、

「隣の部屋で寝ろ。オレは奥で寝る」

平野が言った。

「いいとも」

「じゃ。おやすみ」

平野が去った後、隣の部屋の障子を開けた。広さは六畳。壁際に古い屏風を立ててあつた。見ると、壇ノ浦合戦図。壇ノ浦は平家終焉の地だ。

既に布団が敷かれていた。横になったとき、激しい雨が降り始めた。

雨戸を通して雨粒の叩きつける音が聞こえてきた。

何だ？

誰かが布団に入ってきた。同時に部屋中に甘い香りが漂い始めた。平野の妹だ。

私は、たまらなくなつて彼女に背を向けた。少々、切なくもあつた。

どうして彼女がこんな真似を　？　頭が、おかしいのか　？
それとも　彼女の内面は容姿とは全く異なり魔性を得ているのだろうか……？

いや違う。これは、この辺りの風習なのだ。その昔、辺境の地では、客に女性をあてがつて、もてなしていたと聞く。

でも、そんなこと有り得ない。平野は都会で暮らした経験もある現代人だ。

全く見当がつかない。しかし今、私の隣に平野の妹がいるのは事実だ。

雨足は、ますます激しくなる。それに、この匂いだ。

匂いの発生源は、ひよつとして、あの香炉ではないのか　？
例の清盛の香炉だ。香を焚いたのは彼女なのか？　一体、どうすればいいのだ……？

やつと決断することが出来た。

完全無視する。それ以外になかった。

明け方近くになって、彼女は布団から出て行った。今夜の出来事を、私は全て夢だと思うことにした。

七時に朝食を出してくれた。

食欲がないのか、平野は箸さえ取ろうとしない。

「どうした？」

平野は、一瞬、顔を歪め、

「何でもない。ちょっと気になることがあつてな」

食後、平野に従つて散歩に出た。

昨夜の雨で、山の空気が一層、浄化されたらしい。木々の芽が吹き出して、透明な日光が惜しげもなく暖を与えていた。風はそよぎ、空には一点の曇りもなく、山の輪郭が切り絵のように鮮やかだった。

小鳥の囀りも心地よく、全く時間を忘れてしまいそうだ。岩に腰かけると、地面から若草をはらんだ土の匂いが立ち昇ってきた。

「悪くない」

思わず口にした。

「何だ？」

平野が問うた。

「こんな辺境も悪くない」

「ほう」

「それに、分からなくてもいいな」

「何がだ？」

「敦子さんの気持ちさ」

「ほう？」

「都会の便利を忘れれば、田舎暮らしもいいかも知れん」

「都の暮らしを知らなければ、か」

「都だと？」

すると平野は、

「八百年前、オレの祖先は主君の姫君を育てるのに、この地を選んだ。そのとき姫はまだ七つだった。肉親は一人としてない。

痛ましい……。見ての通りの辺境だ。暫くの間、姫は泣いて暮らした。都に帰りたいと駄々もこねた。

しかし、都に帰ってどうなる。姫君ゆえ殺されはしなかったろうが、都にあるのは一生涯続く日陰者の生活だ。それなら、ここに留まる方が、よっぽど増した。オレの祖先は、姫のためなら、どんなことでもした。姫の希望は可能な限り叶えた。そのためには山賊まがいの

「山賊まがい……？」

又も私は聞き返した。しかし平野は、

「いや。よそう。今度は向こうの山を案内しよう」

歩き始めた。

昼食前に屋敷に戻った。

平野の妹が食事を運んで来た。妙な黒い干物が添えられていた。長さ五、六センチある。それを箸でつまんで、

「これは何だ？」

平野に聞いた。

「山椒魚の干物だ」

こともなげに答えた。

「山椒魚？ それって天然記念物じゃないか」

よく見ると、確かに四本の足があった。からからに乾いているので、それほどグロテスクでもない。

「それは大山椒魚だ。こいつは問題ない。もつとも、数が少ないので、めつたに見つからん」

そう言つて口に含んだ。

「大丈夫か……？」

「何を言つてる。すごく貴重なんだぞ。漢方で買つてみる。一匹が二、三万もする」

「そんなに、するのか？」

四、五匹の山椒魚が私の皿に載っていた。これだけで十万以上だ。

「一体、何に効くんのだ？」

「食欲不振、精力減退、疲労回復。勿論、副作用はない。何だ？」

「食べんのか？」

いつまでも箸をつけようとしないうちに平野が言った。

「いや。頂くよ」

「実はな、我々一族の秘密の狩猟場がある。乱獲さえしなければ実入りのいい副業として成り立つんだ」

つまり、この山椒魚は、平野一族の一種の収入源になっているのだ。

「だから遠慮するな。それとも気持ち悪いのか？」

仕方がない。一匹を口の中に放りこんだ。特に味はなかった。味のないスルメみたいだった。

「全部食え」

「妙に精力がついても困る」

「なあ。昼から川釣りをしないか？」

「いいな」

渓流なら見ているだけで楽しめる。車からも、ちらちらと眺めていた。

「そうだ。敦子も連れて行こう」

「ああ。にぎやかな方がいい」

喜んで同意した。昨夜の出来事は、あれは夢なのだ。

「よし。さっそく敦子に言っておよう」

部屋から平野が出て行ったので、私は昨夜の匂いを確かめるため、香炉に近づいて灰を嗅いでみた。

確かに、この匂いだ。

「どうした？」

気がつくと、平野が妹を連れて私の後ろに立っていた。

「行くぞ」

「も、もう行くのか？」

「ああ。沢山釣って今夜の夕飯にしよう」

三人で渓流まで下りて行った。竿は二本しかなかった。敦子さんは釣りをしないそうだ。

十分ほど歩いて渓流に出た。

大小の様々な岩が転がっていた。大きいのは私の背丈より高い。

餌は平野の自家製だった。小麦粉に魚の好きそうなものを混ぜただけのものだ。

ポイントを探って移動している内に、平野達とはぐれてしまった。魚籠は、まだ空っぽだ。

一時間ほど一人でうろついた。川から離れない限り迷子の心配はない。喉が渴けば持たせてくれた水筒の水を飲んだ。

魚が、なかなかかからないのは、センス以前の問題であろうか？

やっと一匹釣れたときは本当に嬉しかった。十五センチくらいの

美しい魚だった。

ひよっとして平野に自慢出来るかも知れない。そう思い、大切に魚籠に入れた。

景色の美しい場所だった。暫く、ここで釣りを続けることにした。しかし、余りに釣れないので、竿を置いて岩の上に登った。身長より高い岩も、形が歪で足がかりがあるせいで簡単に登ることが出来た。

高い場所に登れば何か自分が偉くなったような気がする。

岩の上から周りの様子を眺めたとき、私は腰が抜けるほど驚いた。彼女が裸で水浴びをしていた。平野の姿はなかった。

ようやく悟ることが出来た。奔放なのだ。彼女の性質は見かけとは全く違う。

川の水は非常に澄んでいる。そして、裸でも寒くない時期だ。私以外の見物者もないだろう。

だから彼女の裸を見てはいけないのだ。

私は岩から下りて再び釣りを始めた。

平野の屋敷には、それでもテレビがあつた。テレビは、敦子さんの部屋に置かれていた。広い屋敷に、テレビは一台きりなのだそうだ。

彼女の部屋は六畳ほどで、本棚には人形が飾られていた。綺麗に整頓された、女の子らしい部屋だった。

電波の届きが悪く、見られる番組は限られていた。私達三人は、季節外れのコタツに入って、テレビを見ていた。

途中、平野が席を外したので、二人きりになってしまった。彼女は全く悪びれてなかった。あれは本当に夢だったのかも知れない。

平野は、なかなか戻らなかった。

その間、彼女と話していた。

どこにでもいる普通の女性だった。ドラマ、バラエティ、音楽、映画など、驚くほどの情報通だ。

と、コタツの中の私の手が彼女に握られた。

ちょうどそのとき、平野が戻って来た。

「やあ済まん。ちよっとお袋に頼まれごとをしてね」

彼女の手が私から離れた。入れ替わりみたいに、彼女がコタツから出た。

「何だ？」

平野が言った。

「夕食のお手伝い」

そう言って部屋から出て行った。

「もう、そんな時間か……」

平野が腕時計を見た。

「何か言ってたか？」

平野が聞いた。妹のことを尋ねたのだ。彼女との会話を話してやると、

「ふーん。でも、結構、間が抜けてるだろ？」

「そうか？」

「そうさ。頭は悪くないんだが……。明日、帰るのか？」

「ああ。ちよっとあつてな」

連休は明後日まで。でも明日帰れば、帰省している姉夫婦に会える。

「そうか」

それっきり平野は黙ってしまった。

夕食は六時に始まった。今日は四人で食卓を囲んだ。奥の居間である。

結局、私は一匹しか釣れなかった。平野が七匹も釣ったので、全

員に二匹の魚が行き渡った。

私が釣ったのは、`あまご`という魚だった。

「オレから離れていたとき、何してたんだ？」

平野が妹に聞いた。

「内緒」

彼女は、そう答えた。

「お前、一生、ここにいろよ」

唐突に平野が、私に向かってそんなことを言った。

「ああ。それもいいかも知れん」

「本当！」

そう言ったのは敦子さんだった。私の勘違いでなければ、彼女は喜んでるように見えた。

「息子が二人になると思えば頼もしいわ」

母親が言った。

「林業を手伝わんか？」

「それも面白そうだ」

平野の言葉に調子を合わせた。

勿論、明日の昼には出発する。確かに年に一度くらいなら、ここで過ごすのもいい。山菜も新鮮な川魚も魅力的だ。

食事を終えると、平野と二人で座敷に戻った。少し後に敦子さんも顔を見せたが、九時には自分の部屋に引っこんだ。

平野との話も一通り済み、他にすることもなく、風呂に入った後は、もう寝るしかなかった。

気づいたのは真夜中だった。

布団の中に彼女がいた。そして今夜も香の匂いが漂っていた。今度ばかりは、さすがに無視出来なかった。

「眠れないの？」

冷静に考えれば、どうにも馬鹿みたいな問いかけに、彼女はうなずいたみたいだ。

「昨日も来たね」

「ええ」

燃えるような熱い息を吐いた。

彼女は本気だ。少なくとも私にはそう思えた。

夕食のとき平野は、「お前、一生、ここにいろよ」とか、「林業を手伝わんか？」などと言っていた。

確かに彼女は魅力的だ。それでも、引き換えになるものの大きさを考えると……。

私は彼女の手を取ると、

「こうしてよう」

手を繋いで、そのまま朝まで過ごした。ひよつとしたら彼女を傷つけたかも知れない。

やはり明け方近く、彼女は布団から出て行った。危ういところで切り抜けられた。

だが、それは間違いだった。

朝食のとき、いきなり平野が言った。

「何故だ？ どうして敦子に手を出さん？ スタミナ切れかも知れんと思い、山椒魚まで食わせてやった。お前、まさか女に興味ないのか？ いや。そんなはずはない。一体、どうしたんだ？」

あまりのことに、平野の言葉の意味が分からなかった。

「説明しろ！ 何故、抱かん？ 敦子に魅力を感じんのか？」

「そんなことはない……」

私は、しどろもどろだった。

「なら、どうして！」

「どうしてと言われても……」

言葉に詰まった。

「いいか！」平野は言った。「敦子に手をつけるまで帰さんからな！」

「馬鹿な」

「帰りたいなら言うことを聞け！　まあいい。今夜こそ、必ず、そうしてもらう」

「今夜だって」

「連休は明日までだろ。嫌なら一人で帰れ。歩いてな」

「無茶な」

「聞け。我らの祖先は、重盛公の姫君をお守りして、この地まで逃れて来た。年頃になると青年をさらい、姫との間に子供をもつけさせた。その後、直系は跡絶えたが、まだ傍系が残っている」

「お前と敦子さんか？」

最初に想像した通りだ。

「確かに、オレもそうだが、」平野は続けた。「家祖がそうであるように、現在の当主は敦子なんだ」

「なら、彼女に相応しい相手を見つけて、婿に来てもらえばいいじゃないか」

これが正論だ。彼女なら、絶対、見つかるはずだ。

「分からん奴だ。姫にそうしたように、敦子にも同じ方法で婿を与える」

「オレに、ここに住めと？」

「そうじゃない。抱いてくれるだけでいいんだ」

それで理解した。求められているのは私ではなく、二人の間に産まれる子供なのだ。平野は、そのために私をここに連れて来た。

「しかし。敦子さんは、それでいいのか？」

男の私が躊躇するのだ。

「いいも悪いも、これが我が家の決まりなんだ」

「それほどまでして、一体、何を守っている？」

「血だ」平野は言った。「平家の血だ」

「そんなものを……」

「どちらにしろ、今夜も泊まってもらうからな。おい。どこに行く？」

席を立つた私に平野が言った。
「散歩だ」

屋敷から出た。悪いが逃げることにする。

平野の車で来たのだから歩くしかなかった。

車で二時間以上の道程。

荷物は諦めることにした。幸い、財布と携帯は、いつもの習慣で身につけていた。

坂を下った。後を追って来る気配はなかった。高をくくってるのか？　少し惜しい気もする。馬鹿な男の感傷だ。

道順の記憶は、ほとんどなかった。幾つもの脇道があった。その一つを間違えば、一体、どれくらいロスが出るのか。

道は、どこまでも続いている。ないと思うが、山中で飢え死に……。

まさか。今、始まったばかりなのだ。

腕時計で一時間歩いた。その間、一台の車とも出会わなかった。道が渓流と分かれた。渓流は峻険な渓谷を流れるようになった。

昼になっても目に見える進展はなかった。山の峰が、いつまでも視界に居座り続ける。そんな具合だから、街に近づいているのか、或いは遠ざかっているのか、それさえ見当がつかない。

携帯は一度も繋がらなかった。全く役に立たない。

十時間後、古い小屋の前に座りこんだ。

すっかり日が暮れようとしている。

仕方がない、ここで寝ることにしよう……。

鍵は、かかってなかった。土の床。もちろん電気もない。

脱いだ上着の上に横になった。

とうとう一台の車とも出会わなかった。本当なら、今頃は自宅でくつろいでいる。風呂に入って、ビール一杯もやっている。

連休は明日まで。楽天的に考えれば、時間は、まだたっぷりある。もし、平野の言うことを聞いていたら。今夜も美味しい夕食をご馳走になって、それから……。違う。これで正解だ。寝よう。考えても仕方がない。日の出とともに歩こう。本当に、とんでもない一日になってしまった。

誰かに頬を叩かれて目を覚ました。顔に懐中電灯の光が。

「平野！」

平野がいた。

「探したぞ。一緒に戻ろう」

「放っておいてくれ。オレは一人で帰る」

「それはいいけど、この調子では会社に間に合わんぞ」

「本当か……？」

「下手をすれば、搜索願を出されかねん」

「道を教える！」

「何も目印のない場所で道を聞いてどうする？」

「……」

と、

いきなり平野が土下座した。

「頼む。敦子と寝てくれ。お前には何の負担もかけん。頼む。この通りだ」

「平野……」

「助けてくれ」

私は平野という人間を知っている。嘘はつかない男だ。今の言葉も本当だろう。

気がつけば、古い決まりを守り続けている旧家の業に、すっかり同情してしまっている。

「分かった……」

私は言った。

「本当か？」

「ああ。本当だ。但し、明日は帰るからな」

決断した。

「もちろんだ」

私は平野の車に乗った。

「どのくらいで着く？」

「五分だ。一キロと離れてない」

「嘘だろ？」

正直、驚いた。最低でも二十キロは歩いたはずなのだ。馬鹿みたいに、同じ場所を、ぐるぐる回っていたらしい。

平野の言った通り、五分で到着した。

「まず風呂に入れ」

風呂に案内された。入浴後、寝室に。

既に布団では彼女が横たわっていた。

香の匂いが漂っていた……。

起きたのは昼過ぎだった。彼女は布団からいなくなっていた。

すぐに食事を用意してくれた。四人で昼食をとった。

全員が何事もなかったような顔をしていた。それが少しも偽善的でなかった。特別なことは何もなかったという表情だ。

そうかも知れない。彼らには、これが普通なのだ。と、言うより、安堵しているのだろう。大事な務めの一つを無事にこなせたのだから。

今回も山椒魚の干物が添えられていた。

「全部食べろ」

平野が言った。

もう必要がないとも言えないので素直に従うことにした。

「もう一日いてもらう」

食事の後、平野が言った。

「どういうことだ？」

「初日を無駄にした」

昨日のメンバーで、今日も川釣りに出かけた。

途中で平野がいなくなった。

「平野は？」

すると彼女が私の手を取って、

「こっち」

そこは、昨日、彼女が水浴びをしていた場所だった。彼女は服を脱いで裸になった。

「来て」

その後、私達は手を繋いで歩いた。風が彼女の髪を持ち上げた。美しい横顔。銜いはなかった。私達は公認されている。

今夜も魚が出た。今日の釣果は五匹。全部、平野が釣った。私の皿だけ二匹載っていた。

「客だからな」

平野が言った。それから、

「どうした？」

「いや。ちよつと体が……」

息切れがして、体中のエネルギーが切れかけているみたいだ。筋も痛む。理由が思い当たらないわけではない。しかし、それにしても体力の消耗が激しすぎる。

「釣りで疲れたんだ。風呂に入って寝ろ」

「分かった」

食事の後、風呂に案内された。

裸になって気がついた。ひどく体が痩せている。体重計がないので正確には分からない。しかし、軽く四、五キロは減っている。

以前、腸を悪くして、これくらい痩せたことがある。でも、たった一日では有り得ないことだ。もし、これが彼女のせいなら、今夜は何もすべきでない。

だが、

寝室に行くと、やはり彼女が待っていたのだ。

夜中に目覚めた。恐ろしい夢を見たのだ。

夢の中で、私は得体の知れない怪物に絡みつかれて、しかも快感に喘いでいた。

彼女は健やかな寝息をたてていた。時間を確かめようと腕時計を取ろうとしたとき、私は自分の腕が異様に細くなっていることに気がついた。正味、骨の太さしかなかった。肉が削げ落ちている。胸に手をやると、まるで理科室の標本模型のように肋骨が浮き上がっていた。脚もだ……。

やっと私は悟った。

彼女は人間じゃない。恐らく、平野の先祖が仕えた姫君の怨霊なのだ。そうとしか考えられない。

しかし……。

逃げ切る自信がなかった。必ず、平野に捕まってしまう。

どうにかして逃げなければ、それが出来なければ、間違ひなく私は殺されてしまう。

でも、どうやって。

そうだ。芳一を真似るのだ。

芳一は、体に経文を書くことによって、平家の怨霊から逃れるこ

とが出来た。書き漏らしのせいで両耳を失ったが、命は助かった。

私は、その経を知っている。鞆にはマジックもある。問題は、背中など手の届かない場所をどうするかだ。髪も剃らなければならぬ。しかし、道具がない。

待て。シャツに書いて、それを着ればどうだ？ 頭はタオルで隠す。

一か八だ。

明け方、彼女が去った後、鞆からマジックを取り出した。インクは十分だ。これが駄目なら、私はここで死ぬことになる。

「いない……。気配はするのに、池部の奴、どこに行った……」

平野が私を探している。

「車は？」

母親が聞いた。

「ある。キーも居間のテーブルに残っている」

「きつと外よ」

「ああ。手分けして探そう」

平野と母親は部屋から出て行った。

私は、ずっと寝室にいた。なのに二人には見えなかった。二人とも人間でなかったのだ。

到底、信じられぬ。悪夢のような現実だった。

だが、いいことを聞いた。キーは居間のテーブルにある。

居間に向かった。確かに、キーはテーブルに置かれていた。キーを取って居間から出ようとしたとき、あれが、平野の妹が、居間に入ってきた。

私は動きを止めた。

首をかしげて、こっちを見ている。気配は感じて、やはり見えないのだ。

気のせいとも思ったのか、私を通り過ぎて台所に入った。
私は音をたてぬよう歩き始めた。
が、

あれが再び、こちらに目を向けた。私の足元を見ている。
何というミス。足の裏に経文を書き忘れていた。

蛇のような大口を開けて迫って来た。とっさの判断で、手元の花
瓶を振り上げて、あれの頭に打ち下ろした。

床の上に転がって異様な叫び声を上げた。

私は命の限り駆け出した。

車まで来れた。

ドアを閉めてエンジンをかけた。平野も母親もいなかった。

そのとき、車の屋根に何かが飛び乗って来た。目は裂けて、そこ
から血が流れ出し、鼻は二つの黒い穴となり、顔一面、血管が浮き
上がっていた。

彼女の本性だった。

私は狂ったように叫びながら、思い切りアクセルを踏んだ。

スピードを緩めなかった。振り落としたからといって、何の呵責
も感じない。当然の報いだ。

怪物は、しつこく車に貼りついて、フロントガラスから逆さまに
私のことを睨み続けた。

「見てろ！」

急ブレーキを踏んだ。怪物が車の前に投げ出された。

「やったぞ！」

そのまま腹を轢いてやった。おぞましい悲鳴が、車の下から聞こ
えてきた。

私は助かったのだ。

「友達から逃げて来たと。そうですね？」

私は、うなずいた。

定年間近と思われる巡査から繰り返し質問された。

骨と皮状態で、体中に経文を書き散らしている私のことを、彼はどう思っているのだろう……。おまけに下はタオルを巻いているだけだ。

何もない場所に派出所を見つけた。迷わず助けを求めた。水を飲ませてもらい、何とか息をつくことが出来た。

「しかし、この辺りに平野という家はないんだが……」

「近くではありません。でも、場所は分らないのです」

「そう……。では、何か目印になるようなものは？」

「坂の下に、幹が三つに分かれた大きな松がありました」

「ああ。あそこか……。車で一時間くらいか。昼には着けるでしょう」

「着けるでしょうって……？」

私を見て巡査がうなずいた。

「馬鹿な！」

思わず声を荒げた。行けるものか。怪物は死んでも、まだ平野達が残っている。

「同行しますよ」

巡査が言った。

違う！ そんなレベルの話ではない！

平野家に監禁されていたと、私は巡査に訴えた。怪物のことは一言も話してない。言っても信じてもらえない。

「拳銃もありますから」シンナーを出してくれて、「顔だけでも拭いてはどうです？」

「……」

「ズボンを、お貸ししましょう」

そう言って巡査は奥に消えた。

「この上です」

言いながら、私は坂を見上げることが出来なかった。恐怖が、まだありありと残っている。

怪物の死骸が消えていた。恐らく、平野達が始末したのだ。

「なるほど。では行きましょう」

巡査は、さつさと坂を上がり始めた。

「あ」

一人にされては堪らない。慌てて後を追った。
が……。

何もなかった。屋敷のあった場所が、ただの草深い荒地に変わっていた。

「何にもないですな」

あっけらかんと巡査が言い放った。私は、呆けたように、そこに立ち尽くした。

「帰りましょうか」

巡査に肩を叩かれた。

再び坂を下りて車に戻った。しかし……。屋敷が消えるなんて……。

「大丈夫ですか？」

気の毒そうに私を見ていた。

「ええ……」

「派出所に戻りましょう」

あれは夢だったのか……？

いや。そんなはずがない。こんなに痩せこけている。夢であるはずがない。

途中、少し眠ってしまった。体力の消耗が著しい。

「着きましたよ」

体を揺さぶられて目を覚ました。

どういうことだ？ 外が真つ暗だ。

「下りなさい」

「ここは……」

あの松があった。

「行きますよ」

車から下りて、巡査が坂を上がり始めた。

訳が分からない。それでも後を追った。一人は耐えられない。

坂の上に平野の屋敷があった。

「お帰り」

中から平野が出て来た。

「お連れしました」

巡査は平野に敬礼し、

「もう二度と、このようなことのないように」

そう言った。

「敦子が待っている」

平野が言った。次の瞬間、私は、腕や首のない鎧武者に囲まれていた。

「言っただろう。平家の霊は存在するって。敦子にしたことは許してやる。さあ。中に入れ」

私の肩を掴んだ。武者達が哄笑した。月が雲に隠れる。

私は、その場に崩れ落ちた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799f/>

惚れ薬&坂の家

2011年6月29日03時27分発行